

羽釜

高野 ユタ

ばあちゃんの付き添いできた蚤の市で店先の商品を見るときもなしに見ていると、店の奥から店主らしき男が声をかけてきた。

「にいちちゃん、目の付け所がいいねえ。そいつはなかなかのシロモンだよ」

頭部のさみしい店主が緩んだ口元をにたつかせるのに、俺はなんのことかと辺りを見回した。どうやら男は、目の前の古そうな釜のことを言っているらしかった。これは押し売りコースだな。危険を察知した俺は、適当な愛想笑いを顔へ貼り付けて、半歩分身体を引いた。

「まあまあにいちちゃん、これはただの釜じゃあない。羽釜の中の羽釜ってやつだぜ」

「はあ」

店主は俺の退避姿勢を見破ったのか、「ちよっと触ってみな」と強引に俺の首を掴んで釜へと持っていった。寒空の屋外で開かれている蚤の市だ。釜は鉄製だし大層冷えているだろうと身構えたが、手が触れた羽釜は、なぜか人肌くらいに温かかった。

「な、ぬくいだろう」

「はあ」

「なんだ反応わりいな。すげえだろ？ ま、騙されたと思って。ほい、毎度あり」

「え……ちよっと」

店主は俺の抗議の声も聞かず勝手に羽釜を梱包すると、中古だから特別安くしておいてやるのかなんとか言いながら俺から一万円札をふんだくった。そうして新聞紙とビニールで梱包された羽釜を俺の両手へ押し付けて、あからさまなほくほく顔を浮かべた。勝率の悪い戦いに抗うのを諦めた俺は、軽くなった財布と両腕に重い羽釜をため息混じりに受け取って、ばあちゃんのいる店の方へとぼとぼと戻った。近くまでくると、ばあちゃんはちょうど馴染みの店で買い物を終えたところだった。

「コウちゃんコウちゃん。見て、キュタフヤ陶器の飾り皿。綺麗でしょう」

「キュタフ……なに？」

ばあちゃんは小さな袋からカラフルな陶器を取り出しかけて、俺の抱える大荷物に目を丸くした。

「あら、コウちゃんもなにか買ったの？」

「まあ、うん。なんかよくわかんないけど……多分、お釜……」

普通大学生が絶対に必要としないであろう押し売りされた感満載の品物に、俺はもごもごと口ごもった。けれどばあちゃんは少し驚いた顔をしただけで、「じゃあ重いだろうし、そろそろ帰ろうか」と優しく笑っただけだった。

久しぶりにきたばあちゃんの家は、なんとも統一感のない異国のようになっていた。棚にはマトリョーシカやくるみ割り人形が並び、じいちゃんの仏壇も、どこの国のものかわからない民芸品で賑やかになっている。ばあちゃんはベルシャ絨毯らしき織物の上にちょこんと座ると、買ってきたばかりのキュタフなんだかを丁寧に取り出して、棚の一角にひとつずつ飾った。「コウちゃんも」と促されて釜の梱包を剥がしていくと、見えてきた鉄の肌にはばあちゃんは「あら」とつやのある頬を持ち上げた。

「これはなかなか素敵なお釜さんねえ。ばあちゃん久しぶりに見たわ」

「そうなの？ でもこれ中古だよ」

値段が立派なのは間違いないが、ぱっと見た感じはそこそこの年季の入った普通の釜だ。温かみはあるかもしれないけど、特別目立ったところはない。今月の食費を奪われた俺が口を尖らせるのに、ばあちゃんはにっこり微笑んで羽釜の縁を撫でた。

「コウちゃん、お米をといでくれないかしら」

「米？ いいけど……この釜、使ってみるの？」

三合分の米を掬いながら、ばあちゃんがいたずらっぽく笑う。俺はよくわからないまま用意してもらった米をとき、釜に指示通りの水を注いだ。

「コウちゃん、お釜さんはこっちにお願いね」

振り向くと、台所から一足先に戻っていたばあちゃんが縁側でお茶の用意をしながら手招きしていた。

「なに、薪でも燃やすの？」

「まさか。お釜さんはここにね」

お茶を注ぎ終えたばあちゃんが、とんとんと自分の隣を優しく叩く。

俺はそのさらに隣へ座るよう促され、ばあちゃん、羽釜、俺と横並びに縁側へ腰かける形になる。それから少しの間、羽釜を挟む奇妙な並びで、ばあちゃんとお茶をすすった。

「そろそろかね」

お茶を一杯飲み終えたばあちゃんがそう呟くと、隣に置いた羽釜がカタカタと揺れて、直後大きく羽を広げて飛び立った。浮き上がった羽釜は白い大きな羽を力強く羽ばたかせると、一度くるりと回ってから、瞬く間に遙か彼方へと飛び去ってしまった。

「うん、やっぱり立派な羽釜さんだわ」

驚いて腰を抜かしている俺の横で、ばあちゃんは頷きながら二杯目のお茶をすすった。

「上等な羽釜はね、羽も上等だから、ああして自分で飛んでいくのよ。大丈夫、ちやあんと帰ってくるから」

ばあちゃんは俺の頭をぼんぼんと撫でてから俺の湯のみにおかわりを注ぐと、よっこいしょと腰を上げて台所へ入っていった。俺は狐につままれたみたいない気持ちで、お茶を飲みながら羽釜が飛び去った空の辺りを眺めて待った。しばらくすると、鰹だしと味噌のいいにおいが縁側いっぱいに漂った。

羽釜が飛び立ってから三十分くらいが経った頃、ばあちゃんの言葉通り、空の向こうから羽釜が飛んで帰ってきた。羽釜は、ばあちゃんが用意した派手な柄のクッションの上までやってきて、静かにそっと羽を纏めた。

「おかえりなさい羽釜さん。ちようどよかったわあ」

ばあちゃんは羽釜に話しかけながら、両手で羽釜の蓋を取った。瞬間、俺とばあちゃんの間、真っ白な湯気がもわりと立ち上る。奪われた視界がようやく戻ってくると、湯気の下からきのこの炊き込みご飯が顔を出した。

「あら、山まで行ってきたのねえ。ご苦労さまでした」

羽釜にちよこんと手を合わせてから、ばあちゃんが釜に沿ってへらをいれていく。俺は心なしか自慢げな羽釜へ、ばあちゃんに倣って手を合わせた。

「うまい！」

「うん、美味しいねえ。さすが羽釜さんだわ」

羽釜のご飯は信じられないほどうまかった。俺もばあちゃんも何度もおかわりをして、釜の飯は見る見る減っていった。ばあちゃんが用意してくれた味噌汁は、その美味しさを何百倍もプラスした。

ふたりでご飯をすっかり平らげると、空になった釜と一緒に手を合わせた。俺はアパートへ帰る前に、感謝の気持ちをごめて丁寧に羽釜を洗った。洗い上げた羽釜は蚤の市で見たときよりもつやが出て、触ればやっぱり温かかった。

羽釜のご飯はひとり暮らしのアパートで食べても美味しいけれど、ばあちゃんと一緒に食べるのもっとずっと美味しかった。海に飛べば鯛飯やあさりご飯を、山に飛べば栗ご飯をとレパートリーは豊富だったし、もちろん白飯だけでも美味しくて、ばあちゃんの味噌汁や漬け物との相性も最高だった。そのうちあべこべな異国みたいなばあちゃんの家にも慣れて、たまにお店で見つけた外国の民芸品をお土産に持っていったりもした。そうして毎日のようにふたりで羽釜を空に放っては、帰ってきた羽釜に手を合わせた。ばあちゃんは羽釜が帰ってくるまでの間にいつもみそ汁と付け合わせを作ってくれて、俺は食べ終わったあとの羽釜を丁寧に洗った。

そんな日曜日のことだった。いつもは三十分ほどで帰ってくる羽釜が、一時間経っても二時間経っても、一向に姿を見せなかった。もしかしたら途中でなにかあったのだろうかと思ってしまうほど長い時間が何時間もすぎ、すっかり日が落ちた頃になって、ようやく羽釜は帰ってきた。

「よかった。なにかあったのかと心配しちゃったわ」

「うん。でも大丈夫そう」

いつものように羽を纏めた羽釜はちょっとふらついてはいるけれど、傷もないし元気そうだ。けれど少し、いつもとは様子の違うところがあった。

「なんだろう、このにおい」

羽釜から、いつもとは違う匂いだことのない香りがする。

「なにかしらねえ。羽釜さん、なにを炊いてくれたの？」

ふたり揃って首を傾げながら、そつと蓋を開ける。途端、独特の香りに海の香りなのった湯気が溢れ出し、湯気が消えると、殻つきの海老に貝、輪切りのイカやパプリカ、そして黄色いご飯が見えてきた。

「……パエリアだ」

スペイン料理の大定番、パエリア。羽釜に入っていたのは、それだった。羽釜はいろいろなご飯を炊いてはくれたけど、今まではどれも日本の料理だった。しかもそのパエリアには、なぜかムール貝じゃなくて蛤がのっている。俺が不思議に思っていると、「もしかして……」と隣でばあちゃんが呟いた。

「羽釜さん、代わりに行ってくれたの？」

「どういうこと？」

「海外旅行、おじいちゃんとおばあちゃんの夢だったの。でもお金もなかったし、パンフレットで机上旅行ばかりしていてね。……結局、どこにも行かないうちにあの人が逝ってしまった」

ぼつりぼつりとばあちゃんが言うのに、俺は部屋を見渡した。部屋の半分ほどを占める世界各国の民芸品が、あちらこちらでカラフルに輝いている。

「スペインは最初に行こうって言っていた国で、蛤はね、あの人の大好物なの」

どうして知っているのかしらね、と愛おしそうに羽釜を見つめるばあちゃんの目が、うつすらと滲む。羽釜はそれに応えるように、一度纏めた羽を広げて、もう一度ばさりと羽ばたいて見せた。

「せっかくだし、食べようよ。じいちゃんも、一緒にさ」

俺はまだ熱い羽釜を毛布に包んで立ち上がると、クッションごと仏壇へ連れていった。居間のちゃぶ台も仏壇の前に運び込んで、ばあちゃんと俺とじいちゃん、三人分のパエリアを皿に盛る。蛤たっぷり皿は、じいちゃんの仏壇へ供えた。

ばあちゃんの味噌汁と漬け物と、蛤のパエリア。カラフルに彩られた仏壇を囲んで食べた夕飯は、おかしな取り合わせなのに、なぜかぴったりとはまっていた。それから月に一度、羽釜はいろいろな国の米料理を届けてくれている。

じいちゃんとばあちゃんの机上旅行はちゃぶ台旅行へと進化して、いまや仏間は、世界一周も遠くない。